

言語での出会いに、感謝

言語科学専攻卒業生 佐藤真巳

1996年4月 まだ寒さが残る泉キャンパス。

大人じゃないのに大人になった気持ちで高校から新たに大学という世界へ、不安と希望を胸に歩み始めた日。初めて登校した日の教室は、知らない顔ばかり、その上大半が女性という経験したことの無いその雰囲気から緊張しながら先生や先輩方の話に聞き入っていた日のことを思い出します。

教養学部言語科学専攻（現在の言語文化科）

英語は勿論のこと、他の第2言語も学ぶことができる学科という認識で通い始めてみたら、日本語教育や文化に映像と言葉だけではなく幅広い授業を選び、学ぶことができました。「言葉は記号のひとつである」「無償の愛とは何か」「虹の色は何色か」など記号論・構造言語学・文化人類学・哲学…想像していた勉強とは違った自ら考えて臨む授業に出会い、岩谷先生、俊三先生、津上先生、福地先生、立川先生…高校までとは違った個性的な先生方からも教わることができ、研究室でお茶をご馳走になりながら、授業の話は勿論のこと、本の話、音楽の話、先生方の学生時代の話などを興味深く聞いていた日の事を思い出します。そして、この文章を書かせて頂くまで忘れていましたが、先生方との会話や授業から、ソシュール、チョムスキー、カントにフロイト、そしてシェイクスピア…聞いたことがあった名前をよく知るきっかけにもなり、「シニフィアン・シニフィエとは?」、「ある種のメタファーじゃない?」などと覚えたての専門用語を使い、会話することが、その当時はクールでスマートだと恥ずかしながら考えていたことも思い出しました。

言語科学に通うなかで新たに出会った友人たち。県内や東北地方出身者だけでなく、全国各地から出てきた人たちと知り合い、会うことが出来たことは今まで経験することがなかった出来事でした。みんなと学食やTG（2Fの食堂）では、よく使う「いぎなり」、「いずい」といった宮城の方言を教えたり、違う地方の方言を教わったりと意識しないで言語らしいコミュニケーションをとっていたのではないのでしょうか。

またクラスメイトや友人との連絡手段はまずポケベル、大学の公衆電話をよく使ったこと。そこから PHS（ピッチ）になり、卒業する頃にはみんな携帯電話に移り変わっていったであろうという時代でした。初めてパソコンを買ったのも大学の時でしたし、卒論を書くために初めて買ったという友人もいました。そして今と違ってインターネットも家の電話回線（アナログ回線）だったため、インターネット中は電話が繋がらず話中になり、実家だった人たちは両親に怒られた方も多かったのではないのでしょうか。

1、2 年は単位に追われ、シラバスとにらめっこ。3 年生になると、教養学部以外の人たちは泉キャンパスから土樋キャンパスに通うようになり、知っている顔ぶれが居なくなってしまう。もちろん泉返しになっている人たちもいましたが…その上今更ながら、4 年間泉キャンパスに通うことを知った友人もいました。

一般教養が終わり専門科目を泉キャンパスで過ごす日々。より専門的な授業を受けていくなかで、同じ教養学部の人間科学と情報科学の人たちと交流もでき、一緒に図書館でレポートを書いたり、飲みに行ったりと新たな出会いもありました。そしてこの頃から同じクラスでも顔を合わせる機会が減り、たまに廊下で会うと「久しぶり！元気？」と声を掛け合い、世間話をしてきたこと。その上特にこの頃の女子は少し会わないだけでも、目を見張るぐらい変わる方もいて驚いたこと。また言語の特徴でもあると思いますが、どの学年も女子率が高く、その上綺麗な女性が多い。これは初代の先輩から現在に至るまで、そして未来まで変わらないことのような気がしています。私を含め、皆様のなかには今でも忘れられない方がいるのでは…。

少し話が脱線してしまいましたが、私はドイツ語を専攻していたこともあり、在学中多くの留学生と交流を持つことが出来ました。ヴィースバーデン大学からの留学生と仲良くなり、一緒に歩坂町（友人のアパートで）で飲んだことも思い出です。約 20 年経った今でも、彼ら彼女らとは交流が続いています。

最終学年、私にとって忘れることがない映画ゼミ。私が 1 年生の時に七ヶ浜町の東北学院高山セミナーハウスで、下館先生のゼミ（3 学年上の先輩たち）が初めて映画を作られていて、ロンドンで活躍されていた原田監督が手取り足取り、時には厳しくご指導している姿を遠くで見させてもらいました。その時、いつか自分もこのゼミでやりたいと思ったのがきっかけで、3 年生の 12 月頃だったと思いましたが偶然集まった 10 人の仲間と一緒に映画を制作することになりました。ただ映像作品を作るというゼミではなく、各々が論文も書くという過酷な下館ゼミでしたが、4 年生の 1 年間をフルに使い、遅くまで研究室で話し合い、就職活動の合間も脚本の打ち合わせをしたり、ロケ現場を探したり、役者になってもらえる人に頼みに行ったり、七ヶ浜町で合宿しながら撮影したり、旭ヶ丘の青年文化センターで編集した

りと、就活に部活やバイト、そして授業の合間でよくやったものだと今となっても中々ハードな4年生だったなあと思わされます。ただ皆で楽しみながらも苦痛を感じ、時には口論になったり、時には喜びあったりしながら、自分たちで何か残そうと、今後の後輩たちにも繋がる作品を作ろうと、もがいていた卒業制作ゼミでした。ありきたりな表現にはなりますが、今となってはいい思い出、いやとてもかけがえのない学生時代の貴重な経験となりました。まさしく青春時代を大学で仲間と過ごすことが出来ました。

卒業後、私は就職をせず、言語科学の研究生としてゾンダーマン先生にお世話になり、ドイツ語だけでなく欧州・ロシア文化を教えて頂きました。その後ドイツの語学学校に留学し、ドイツの大学への入学を目指しましたが、語学力が足りず、残念ながら入ることができませんでした。就職をしないで、留学し、勉強したかったのは、漠然とではありましたが、映像からみる記号論を学んで、将来は映画監督になりたい、そして大学の先生になりたいと浅はかでしたが夢描いていました。特別成績がいい方ではなかったのに、当然の結果だったとは思いますが、自分の思い描いたプラン通りにはいかず、初めて挫折を経験させられました。

そんな折、前にも書きましたが、大学で知り合った交換留学生（Simone）の紹介で、フランクフルトの映像制作会社（GOEBELundMATTES）でインターンシップをさせてもらうことになり、当然ながら周りはドイツ人という環境の中でコマーシャル作りなど実践的な経験を積むことができ、充実した日々を過ごすことができました。本当に人と人はどう出会い、どう繋がっていくかは分からないものですね。

現在私は、テレビ番組の編集マンとして仙台で働いています。様々な事件や事故、そして県内の話題にスポーツ等を担当しており、カメラマンが撮ってきた映像の中から場所や物、人の動きや表情など、原稿に合った映像を見つけ、時間に追われながらもワンカット、ワンカット選び繋ぎ、誰が見ても分かるような作品になるよう心がけながら編集しています。

皆さんが何気に観ているテレビのニュース番組には、デスク、記者、カメラマン、アシスタント、音声、CG、編集、送出、アナウンサーなど数多くの人たちの力があって、ひとつひとつのニュースを放送しています。それぞれの役割は違っても、各々の個性と責任、そして良いものを作ろう、視聴者に何か伝えようという思いで日々の番組作りに取り組んでいます。その為には技術的なことは勿論必要ですが、様々なポジションの人たちとコミュニケーションをとってこそ作れるものだとようやくですが、最近気づくようになりました。このコミュニケーション、そして各分野とのコラボレーションを学んだ基礎となったのが東北学院大学だったことにも気づかされました。

大学に通わせてくれた親に感謝、下館先生をはじめ多くのことを教えて下さった先生方にも感謝、また偶然出会うことができた…いや必然に出会った友人たちにも感謝しています。

言語で学んだこと、ゼミでのかけがえのない経験、そして大学時代に出会った人々、それは私にとって間違いなく、現在の職に就ききっかけとなりました。勿論皆がみんな希望の職で働くことは出来ないかも知れません。現に私も映画監督には今はなっていません…。

しかし自分の道を見つける礎になった人が、言語の卒業生にいることは、まぎれもない事実です。これは30年という歴史の中だけでなく、今後の卒業生にも繋がっていくものだと信じ、祈っております。そしてまた私も言語の卒業生として恥じないように、これからも一日一日を大切に精進していきたいと思います。

2000年度言語科学専攻卒業 佐藤 真巳



経歴

卒業 2000年3月卒業

学科 言語科学専攻

ゼミ 3年次・岩谷ゼミ 4年次・下館ゼミ

現職 (株)仙台放送映像制作部編集

所属：(株)アースワーク